広い湯船にみんなで入浴。
石井さん(増市町)親子は
家族の温もりを銭湯で温めている。

銭湯最高

のんびり、ゆったり身も心も温まる銭湯に行こう。

「銭湯はいいねぇ」。
銭湯を利用するお客さんは、口々にそう言う。
「広い湯船でのんびり入れる」「温まってさっぱりする」。
その理由はいろいろあるが、どれも満足感にあふれている。
昭和40年代に36軒あった市内の銭湯が次々と姿を消し、
現在では17軒。
燃料費の値上がりや経営者の高齢化、
設備の老朽化などが主な原因。
地域を温めてきた銭湯が無くなることは、
寂しさを象徴する出来事の一つであろう。
お風呂付きの住宅が主流だが、
銭湯の役割は、入浴客を迎えることだけではない。
住民同士のふれあい、
心身をリフレッシュする場として地域を支え、
地域文化の拠点という歴史を刻み続けている。

お客さんに満足してもらえることを第一に考え、堅実にやっています

松の湯（母恋南町）を経営する
米田（よねた） 尚文（なおゆき）さん

室蘭に銭湯が登場したのは明治6年。沢町の「滝ノ湯」が始まりで、旅館に併設されていた。大正6年には、6軒に増え「湯室（ゆしつ）営業組合」が発足。同14年には、現在の「室蘭浴場組合」になり、今年で結成82年を迎える。

その後、室蘭は天然の良港と鉄鋼などの製造業を両輪として、北海道経済をリードし人口も増加。昭和44年には18万人を超えた。

「忙しかったねぇ。浴室は、お客さんの話し声や桶がぶつかる音、子どもたちの歓声でにぎやかだった。お湯も活気もあふれていた」と、母恋南町で松の湯を営む米田尚文（なおゆき）さんは振り返る。松の湯は昭和4年からのれんを掲げ、78年の歴史を持つ。米田さんは、札幌生まれで、銭湯を営む父の背中を見て育った。室蘭に縁があって、昭和43年に奥さんの美恵子さんと結婚し、3代目の経営者となった。

「いつもお客さんがいっぱい来てくれていたが、昭和40年代後半のオイルショックから減少が始まった。危機感はあったが、銭湯は、呼びかければ集まるものではない。お客さんに満足してもらうことを第一に考え、堅実にやっています」と米田さん。営業日は、毎日番台に座り、お客さんを温かく迎え入れている。

松の湯は、15時に開店し22時に閉店する。営業時間は、何十年も変わらない。閉店後は、深夜まで浴槽や床の掃除などを行う。翌日は、正午近くにボイラーに火をつけ、湯を沸かしてのれんを掲げる。毎日繰り返す作業だが、決して手を抜かない。お客さんに満足してもらいたい気持ちを込めて家族みんなで取り組んでいる。

米田さんは、室蘭浴場組合の組合長を務める。「冬至のゆず湯やリンゴ湯、ラベンダー湯、ショウブ湯、レモン湯など、銭湯でしかできないイベントをそれぞれの銭湯で行っているんだけど、燃料（重油）が高値安定で、どこも大変だよ。設備も古くなったけど、更新できない」と、銭湯に吹き付ける風の冷たさを話す。お客さんからも心配する声が届く。「ここがなくなっちゃ困るよ」「お客さんが集まる良い方法はないかね」など、地域に欠かせない銭湯を応援する声は温かい。

「銭湯は、今でも身も心も洗い流し、人と人がふれあう地域の憩いの場。その場所を失くしたくない。地域に愛され、育てられてきた恩返しは、まだ終わっていないと思う」。

米田さんは、お客さんが帰るときに必ず「ありがとう。気をつけて」と声をかける。お客さんからも「ありがとう」と返ってくる。お互いに感謝する。そんな温かい空間が銭湯に残っている。

銭湯を巡ってみるとまちの意外な一面を発見します

室蘭は、沢ごとに集落を形成してきたため銭湯が多かった。それが室蘭らしさだが、市民が気がつかないまま時が流れていった。

平成15年11月末、室蘭工業大学のイベントサークル「スタジオ催事」が、銭湯のスタンプラリーを企画した。2月末までの3か月間で、当時19軒ある銭湯すべて利用した人のほか、参加者にも抽選で景品を贈呈するようにした。当時、大学4年生で企画立案、運営を行った横山陽平（よこやまようへい）さんは「面積が狭い室蘭に銭湯が多くあることを知り、驚いた。銭湯を巡って、市民が知らない、気がつかない一面を発見できたら、おもしろいんじゃないか」と企画意図を話す。各銭湯にも足を運んでイベント

（4ページにつづく）

体重計と言えばコレ

浴室にはいすも用意し
ゆっくり一休みできる

懐かしい自動マッサージ機

発見！ 銭湯の定番

銭湯定番の湯おけ

（3ページからつづく）

の協力をお願いした。「銭湯によって、タイル絵などの装飾や雰囲気づくりなど、様々な個性があって発見の連続でした。仲間と一緒に何度もお風呂に入って、裸と裸の付き合いをしたことも大切な思い出。友達の絆を深めることができたと思う」と銭湯の魅力と効果を体で実感したようだ。

銭湯スタンプラリーは、市民の関心を引いた。冬季ということも追い風になり、19軒の銭湯すべてを利用した「完全湯破者」が30人にもなった。横山さんは「子どものころ、銭湯を利用したことがあっても、なかなか足が向かないというか、利用するきっかけがなかったかもしれない。イベントの効果は予想以上でした。銭湯の経営者の方々から『新しいお客さんが増えたよ』と聞いたときはうれしかった」と、笑う。

銭湯スタンプラリー
元実行委員長
横山 陽平さん

19軒の銭湯をすべて巡った高橋順子さんは「週に1回から2回通う銭湯めぐりは楽しかった。地図を片手にまちを巡り、初めて足を踏み入れた地域もあって、まちを探検し再発見できたことも楽しかった」と振り返る。また各銭湯で「完走までもう少しだね」「気持ちいい湯でしたよ」など、声をかけ合い、気軽にふれあう。一期一会にも似た銭湯の魅力が温かい思い出になっているという。

銭湯スタンプラリー参加者
高橋 順子さん

「銭湯によって薬湯や泡風呂などの湯も違うんですよ。それが面白くて、家に帰ってから、見取り図などをスケッチし、コメントも添えてみました。今では宝物ですよ」。スタンプラリーから、4年が経過したが、熱い思い出は冷めていない様子。「銭湯はリラックスできて、人の温もりに触れることができる場所。喫茶店におしゃべりしに行く感覚で行ってみましょうよ」と銭湯利用を呼びかける。

高橋さんの「銭湯スケッチブック」には、各銭湯の感想を込めて、趣味の川柳が書かれている。

「人情も　湯船も深し　港湯は」。

みんなで集まりやすい 銭湯はふれあい広がる 元気の源

港北町にある高平湯では、高齢者の集いの場を提供している。「ニコニコ健康サークル」。70歳から90歳代の人々が、おしゃべりや背中を流し合うなど、笑って楽しんで元気でいようというサークルだ。毎月第3水曜日に開催し、20人ほどが和気あいあいと活動している。活動のまとめ役をしている長沢節子さんは「一人暮らしの高齢者の場合、話し相手がいないので、テレビを観るしかない。それでは寂しい。外出するきっかけに銭湯はぴったりだと思った。高平湯を経営する青山さんの理解があってサークル活動ができました。みんなで集まり、ふれあいが広がる銭湯は元気の源」と心と体の健康維持に欠かせない場であることを強調。参加者の一人は「みんなとおしゃべりした後、ゆっくりと湯につかって楽しい時間が過ごせる。毎月楽しみです」と、毎月のサークルの開催日が待ち遠しい様子。にぎやかな場所であり、リラックスもできる銭湯。健康的な交流の場も演出している。

ニコニコ健康サークルのまとめ役をしている
長沢 節子さん（左から２人目）

広い湯船の銭湯などで手足を伸ばすことは、加齢による関節の痛みに効果的です。

市立室蘭総合病院
整形外科部長
石川 一郎　先生

回復期のリハビリとして温熱療法を行うなど、体を温めることの効果を実際の治療でも取り入れています。

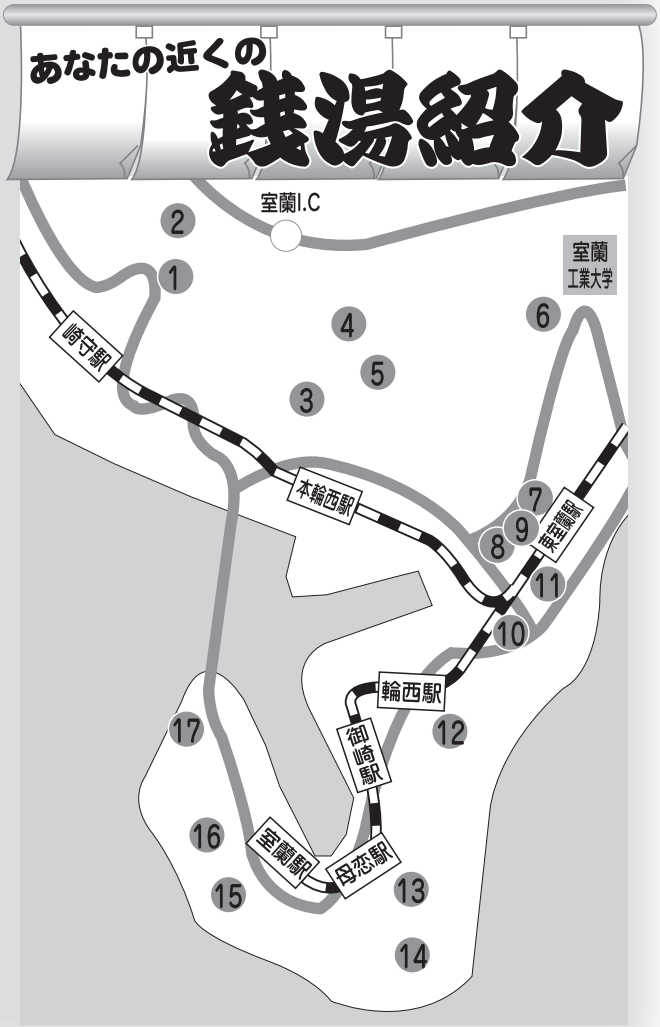
温かいお湯に入り全身を温めることは、血液の循環が良くなり、新陳代謝も活発になります。それにより、筋肉の「コリ」や関節の痛みが軽くなるなどの効果が得られます。

また、広い湯船の中で手足を伸ばすことは、お湯の抵抗があり筋肉をつける適度な負荷がかかるので、ちょっとした運動にもなるでしょう。ただし、椎間板ヘルニアなどで急性期（病気が進行しているとき）のときは、入浴は避けた方が良いでしょう。また、患部に腫れや熱感、痛みが著しいときも同様です。心臓病や高血圧などで治療を受けている方も、休みながら湯につかりましょう。

膝痛の高齢者の場合、銭湯は湯船が低いので、入浴しやすいと思いますよ。ゆったりのんびりできる銭湯や温泉の利用をお勧めしたいですね。

あなたの近くの銭湯紹介

		住所・連絡先	営業時間・定休日
①	千代の湯温泉	白鳥台2－11－5 ☎(59)4800	10時～22時 定休日　金曜
②	白鳥湯	白鳥台3－19－1 ☎(59)2501	15時～21時 定休日　水曜
③	澤の湯	本輪西町3－3－14 ☎(55)7409	15時～21時 定休日　金曜
④	黄金湯	本輪西町3－25－7 ☎(55)7853	15時～22時 定休日　火曜
⑤	高平湯	港北町4－10－1 ☎(55)7813	15時～22時30分 定休日　月曜
⑥	水元湯	水元町11－10 ☎(44)5464	15時～21時 定休日　水・金曜
⑦	中島湯	中島町1－24－2 ☎(44)3286	14時30分～22時 定休日　月曜
⑧	富士の湯	中島町1－11－19 ☎(44)3769	11時～22時 定休日　金曜
⑨	楽々温泉	宮の森町4－22－17 ☎(45)3121	11時～24時 定休日なし
⑩	吉の湯	東町4－4－2 ☎(44)4286	15時～21時 定休日　金曜
⑪	湯らん銭	東町1－29－1 ☎(43)2619	14時～23時 (土･日･祝日12時～) 定休日なし
⑫	栄輪湯	輪西町2－13－3 ☎(44)0149	14時30分～22時 定休日　金曜
⑬	旭湯	母恋北町1－4－18 ☎(22)2295	14時30分～21時30分 定休日　水曜
⑭	松の湯	母恋南町1－2－16 ☎(22)4095	15時～22時 定休日　月曜
⑮	松の湯	栄町1－2－4 ☎(22)7077	15時～22時 定休日　金曜
⑯	港湯	海岸町3－10－19 ☎(22)2898	15時～21時30分 定休日　金曜
⑰	むろらん温泉「ゆらら」	絵鞆町4－2－17 ☎(27)4126	11時～22時 定休日　毎月第3木曜



みんなの銭湯の思い出は利用することで守られる

男の子3人を連れた石井さん（2ページの写真）が松の湯ののれんをくぐってきた。「子どもたちは、銭湯に来ることを楽しみにしています。広い湯船でみんなで入るという温泉気分がうれしいようです。子どもに背中を流してもらうと、子どもの成長を感じますね」と石井さん。銭湯でのひと時は、子どもとふれあう貴重な時間になっている。「銭湯を知らない子どもにならないよう、入浴マナーも教えないといけませんね」と、やさしく話してくれた。

女湯から、お母さんが出てきた。「アイス買って」と、子どもたちが駆け寄る。昔と変わらないほほえましい姿が映った。銭湯には、昔懐かしい思い出がいっぱい詰まっているのかもしれない。お父さんの大きな背中。裸の付き合い。入浴後の語らい。何気ないひと時が、10年、20年たっても銭湯に来ることで甦る。懐かしい気分は心地よい。こんな思いを、次の世代に引き継ぐことが大人たちの役割かもしれない。

憩いの場「銭湯」を守るには、住民が利用することしかない。家族や友達を誘って銭湯に行こう。湯につかってリラックスした会話は、家庭じゃ味わえない。銭湯でホットするひとときを390円（大人一人の入浴料）で買ってみよう。

銭湯で見つけた心に響く詩の紹介

銭湯すたれば人情もすたる
銭湯を知らない子供たちに
集団生活のルールと
マナーを教えよ
自宅にふろありといえども
そのポリぶろは親子の
しゃべりあう場にあらず、
ただ体を洗うだけ。
タオルのしぼり方、
体を洗う順序など、
基本的ルールは
だれが教えるのか。
われは、わがルーツを
もとめて銭湯へ

（詩人　田村隆一さん）

インターネットのラジオ放送で銭湯特集を聞こう

コミュニティFM放送局の開局を目指し、地域密着型のインターネットラジオを制作する「ぼこいふじエンターテイメント」の皆さんが銭湯特集を放送します。同団体のホームページ（http://bokoifuji.com/）からご覧ください。